V 南米
[アルゼンチン]

1. 一般経済の概況

アルゼンチン経済は、94年末に発生したメキシコ通貨危機の影響により一時悪化し、95年の実質国内総生産（GDP）の成長率は、マイナス2.8%と落ち込んだが、96年以降は3年連続でプラス成長となった。しかし、99年1月のブラジルにおける通貨切り下げの影響による対ブラジル向け輸出の減少、同年10月のアルゼンチン大統領選挙を前にした国内経済への先行き不安の高まりなどから、投資および消費が停滞し、99年はマイナス3.0%と4年ぶりのマイナス成長となった。

アルゼンチンでは、91年の兌換（だかん）法導入（これにより、1ペソ＝1ドルでの内外通貨の交換性が制度的に保証）以降、インフレが急速に収束し、89年に約5千%にまで達した消費者物価上昇率は、94年には3.9%となり、99年はマイナス1.8%となった。しかし、失業率（主要都市部）は、94年末に発生したメキシコ通貨危機による景気の落ち込みを契機に、雇用情勢が大幅に悪化し、96年には17.4%にまで達した。その後、98年には12.4%まで低下したものの、99年は13.8%と再び上昇した。99年の貿易収支は、国内需要の縮小から輸入が減少する一方、原油価格の回復による燃料輸出の増加、ブラジルやチリの景気回復などにより輸出額が漸増し、貿易赤字は前年比56.0%減の22億ドルと縮小した。

表1　主要経済指標

区分／年	1995	1996	1997	1998	1999
実質GDP成長率（%）	▲2.8	5.5	8.1	3.9	▲3.0
消費者物価上昇率（%）	1.6	0.1	0.3	0.7	▲1.8
失業率（%）	16.6	17.4	13.7	12.4	13.8
貿易収支（百万ドル）	841	49	▲4,019	▲4,944	▲2,175

資料：INDEC（国家統計局）
注1：98年、99年の実質GDP成長率は暫定値
2：消費者物価上昇率は、88年＝100とした消費者物価指数の各年12月対比
3：失業率は、各年10月時点の数値
4：98年の貿易収支は暫定値

2. 農・畜産業の概況

アルゼンチンは、日本の国土の約7.5倍に当たる2億7,800万ヘクタール（278万平方キロ）の国土を有し、ブエノスアイレス州を中心とするパンパ地域は、平坦かつ肥よくな土地条件に加え、気候も温暖で降雨に恵まれ、穀物と牧畜の大生産地となっている。

アルゼンチンの農業は、GDPの5.4%と、国内産業に占める比率は大きくないが、農産物輸出額は全輸出額の約6割を占め、農業は、外貨獲得上、極めて重要な地位にある。99年の農林水産品（1次産品）およびその加工品の輸出額（FOBベース）は、農産物国際市況の低迷などから前年比11.7%減の134億ドルとなった。

88年の農業センサスによると、すべての農畜産業経営体（42万1千戸）のうち、土地の境界が確定している経営体数は37万8千戸で、それらが所有・占有している土地面積は1億7,700万ヘクタールであった。また、経営体数では全体の1%に満たない1万ヘクタール規模以上の経営体が、土地面積の約34%を占めている。

3. 畜産の動向

(1) 肉牛・牛肉産業

アルゼンチンは、世界の牛肉生産量の約5%を占めている。同国の肉牛生産は、肥よくなパンパ地域を中心に、放牧による牧草肥育が一般的である。同国は、年間1人当たりの牛肉消費量が60kgにも及ぶ大消費国であり、牛肉生産量の約13%が仕向けられる輸出では、EU向けや北米自由貿易協定（NAFTA）地域向けの割合が高い。

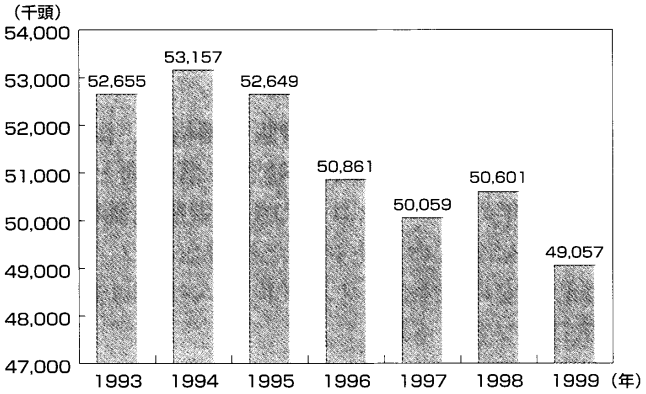
①牛の飼養動向

アルゼンチンの牛飼養頭数（乳牛を含む）は、94年以降減少傾向で推移している。94年に5,316万頭に達した牛飼養頭数は、99年には4,906万頭となった。これは、95、96年の2度の大きな干ばつと98年のエルニーニョ現象による洪水の被害に加え、96年の穀物価格の高騰に

より、肉牛生産から穀物生産への転換が増加したこと、国内経済が低迷したことなどによるものである。

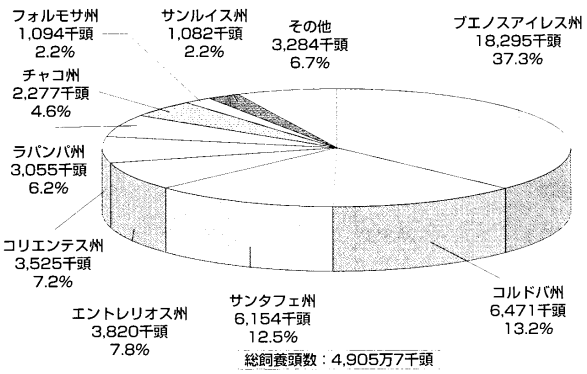
99年の州別牛飼養頭数のシェアを見ると、パンパ地域に属するブエノスアイレス州（37%）、コルドバ州（13%）、サンタフェ州（13%）の3州で、全体の63%を占めている。

図1　牛飼養頭数の推移



資料：INDEC（国家統計局）

図2　牛の州別飼養頭数（1999年）



資料：INDEC（国家統計局）

②牛肉の需要動向

アルゼンチンのと畜頭数は、98年は牛群再編の兆しを反映し、前年比11.9%減の1,127万頭、枝肉生産量も9.6%減の245万トンとなった。しかし、99年は去勢牛のと畜増加により、と畜頭数は7.7%増の1,214万頭、枝肉生産量は8.2%増の265万トンとなった。

99年の牛肉輸出量は、国内の去勢牛価格が国際競争力を回復したことや、新規市場の開拓などにより、前年比15.9%増の34万2千トンとなった。国別に見ると、最大の輸出先である米国向けは、冷蔵肉が増加して前年比19.9%増の8万トンとなった。次いでチリ向けが11.8%増の6万1千トン、ドイツ向けが4.6%増の5万1千トンとなっている。また、カナダ向けは前年比7倍増の2万5千トンと大幅に躍進した。

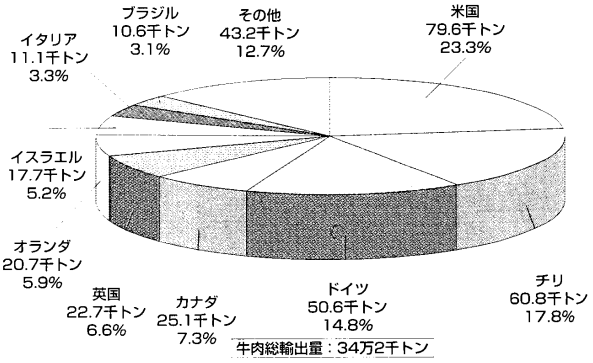
一方、輸出額ではドイツ向けが最大で、全体の約3割を占めている。EUは、アルゼンチンに対し、高品質な生鮮冷蔵・冷凍牛肉に対する関税割当である高級牛肉枠（ヒルトン枠）として、年間2万8千トンの割当を認めており、アルゼンチンにとって、ドイツはヒルトン枠内で最大の輸出先となっている。

表2　牛肉需給の推移

区分／年	1995	1996	1997	1998	1999
牛と畜頭数（千頭）	12,857	12,917	12,795	11,273	12,141
生産量（千トン）	2,688	2,694	2,712	2,452	2,653
輸出量（千トン）	520	477	437	295	342
1人当たり消費量（kg）	62.7	63.0	64.0	59.1	63.3
去勢牛生体価格（ペソ／kg）	0.79	0.81	0.91	1.06	0.79

資料：SAGPyA（アルゼンチン農牧水産食糧庁）
注1：生産量、輸出量は枝肉換算ベース
　2：1999年は暫定値

図3　牛肉の輸出相手国（1999年）



資料：SAGPyA（アルゼンチン農牧水産食糧庁）
注：数値は暫定値

③肉牛・牛肉価格の動向

世界でも有数の家畜取引頭数を誇るリニエルス家畜市場における99年の肥育牛（去勢牛）価格は、記録的な高値となった98年に比べ、25.4%安の1kg当たり0.79ペソと大幅に下落した。これは、98年後半以降、アルゼンチンの経済情勢が悪化し、生産者が所有する牛を相次い

で現金化した影響が大きいとされる。99年の小売価格（ストリップロイン）は、前年比10.7%安の１kg当たり4.42ペソとなった。

(2) 飼料穀物

アルゼンチンは、世界のトウモロコシ生産の２～３%を占めるにすぎないが、貿易量では世界の１～２割を占め、米国に次ぐ世界第２位のトウモロコシ輸出国の地位にある。

①穀物の生産動向

98/99年度のトウモロコシ生産量は、トウモロコシ価格の下落により作付面積が減少したことなどから、1,350万トンと前年より30.3%減少した。単収も、11.6%減の１ヘクタール当たり約5.4トンとなった。なお、同年度の小麦生産量は、前年比27.7%減の1,070万トン、ソルガムは14.4%増の322万トンとなった。

②穀物の輸出動向

99年の主要穀物輸出量は、トウモロコシが前年比37.2%減の774万トン、小麦が15.7%減の856万トン、ソルガムが59.7%減の55万トンとなった。国別輸出量のシェアを見ると、トウモロコシはスペイン向け（19%）、チリ向け（９%）、エジプト向け（８%）、小麦はブラジル向け（72%）、また、ソルガムは日本向け（51%）、ヨルダン向け（25%）、チリ向け（13%）などで占められた。

③穀物の価格動向

99年の主要穀物の生産者販売価格は、国際市況の低迷から前年に引き続き下落傾向となった。同年のトウモロコシの生産者販売価格は、前年比8.5%安の１トン当たり89.25ペソ、小麦は5.6%安の104.5ペソ、ソルガムは13.1%安の67.75ペソとなった。

表３　主要穀物生産量の推移

区分／年度		94／95	95／96	96／97	97／98	98／99
トウモロコシ	作付面積（千ヘクタール）	2,958	3,415	4,153	3,752	3,270
	収穫面積（千ヘクタール）	2,522	2,604	3,410	3,186	2,515
	生産量（千トン）	11,404	10,518	15,537	19,361	13,504
	単収（トン／ヘクタール）	4.522	4.040	4.556	6.078	5.370
小　麦	作付面積（千ヘクタール）	5,308	5,088	7,367	5,919	4,887
	収穫面積（千ヘクタール）	5,221	4,878	7,100	5,702	4,827
	生産量（千トン）	11,306	9,445	15,914	14,800	10,703
	単収（トン／ヘクタール）	2.166	1.936	2.242	2.596	2.217
ソルガム	作付面積（千ヘクタール）	622	671	805	920	880
	収穫面積（千ヘクタール）	477	550	678	782	735
	生産量（千トン）	1,650	2,132	2,499	3,762	3,222
	単収（トン／ヘクタール）	3.459	3.876	3.684	4.810	4.385

資料：SAGPyA（アルゼンチン農牧水産食糧庁）

表４　主要穀物輸出量の推移

（単位：千トン）

区分／年	1995	1996	1997	1998	1999
トウモロコシ	6,041	7,031	10,920	12,334	7,742
小　麦	6,781	5,833	8,480	10,143	8,555
ソルガム	183	666	642	1,352	545

資料：SAGPyA（アルゼンチン農牧水産食糧庁）

表５　主要穀物の生産者販売価格

（単位：ペソ／トン）

区分／年	1995	1996	1997	1998	1999
トウモロコシ	115.17	151.88	108.15	97.55	89.25
小　麦	171.42	198.02	143.82	110.68	104.50
ソルガム	77.63	128.76	83.85	77.92	67.75

資料：SAGPyA（アルゼンチン農牧水産食糧庁）
注：サンタフェ州ロサリオ商品取引所における１～12月の平均取引価格

99～2000年にかけ堅調な去勢牛生体価格（アルゼンチン）

アルゼンチンの肉牛飼養頭数は、94年以降減少して99年には4,906万頭となったが、2,000年の推定飼養頭数は4,950万頭と、5,000万頭には及ばないものの、増加基調で推移している。これには、主要生産地域における生産率の向上とへい死率の低下が寄与している。同国では、98年中盤にかけて去勢牛の生体価格が記録的な高値をつけたことから、それと前後して高値販売を期待した生産者が雌牛のと畜を控え、家畜の保留傾向が始まった。この傾向は99年後半から2000年にかけて徐々に弱まり、その後は安定期に入ったといわれている。

と畜頭数は99年が1,214万頭、2000年が1,222万頭で、2000年は前年に比べ多少増加した反面、枝肉生産量はそれぞれ265万トン、263万トンと、むしろ2000年はわずかながら減少している。95～99年の去勢牛の平均と畜体重は増加基調だったが、2000年には450kgと前年を若干下回っており、これが枝肉生産量の減少につながったと考えられる。背景には、99年後半から家畜保留の傾向が弱まったことにより雌牛のと畜割合が徐々に増え、全体の平均と畜体重に影響したことがあるといわれている。

世界有数の取引頭数を誇るリニエルス家畜市場の去勢牛の生体価格は、98年７月には１kg当たり1.26ペソという史上最高の高値を記録したものの、その後99年にかけて一気に下落した。価格が急落した背景には、98年後半からアルゼンチン経済が悪化し、各種投入資材の支払いのため、必要に迫られて生産者が次々と家畜を現金化したことがあるといわれている。そして、99年は１kg当たり0.74～0.84ペソの通常の範囲で推移し、2000年の生体価格は0.76～0.92ペソと前年を上回って推移した。

2000年は前年から続く景気の後退、失業率の上昇、食肉処理加工部門の経営悪化、資本財の現金化指向、口蹄疫問題による輸出市場の一時的閉鎖、牛海綿状脳症（BSE）問題によるEU向けヒルトン枠輸出の減少など、どれをとっても国内市場に家畜が飽和する条件がそろい、実際に国内市場への供給量は増加した。こうしたマイナス要因ばかりの状況下で国内価格が上昇した要因には、アルゼンチンの牛肉の消費指向が高く、国内需要が供給を上回ったこと、国内消費の３割を占める独占的な大型スーパーマーケットが、最高品質の肉牛をリニエルス家畜市場で買い入れるため、結果として同家畜市場の生体価格がつり上がったことなどがあるとみられている。